

Title	『先駆』時代の新人会の活動
Sub Title	The Shinjinkai activity in The Senku (Pioneer) Period
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori) 酒井, 正文(Sakai, Masafumi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.6 (1981. 6) ,p.29- 53
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	米山桂三先生追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810615-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『先驅』時代の新人会の活動

中 村 勝 範
酒 井 正 文

- 一 序
- 二 活動の背景
- 三 労働者との接触
- 四 人物往来
- 五 地方伝道
- 六 結語

一 序

新人会は人類解放と日本の合理的改造を旨とす東京帝国大学の学生思想・運動団体であつた。この新人会は大正九（一九二〇）年二月、機関誌を『デモクラシイ』から『先驅』と改題した。『先驅』は同年八月まで刊行されたから、この時期は約七カ月である。われわれはすでに『先驅』の社会改造思想が、普通選挙と議会による改良主義を否定し、サンジカリズム的急進思想へ急速に傾斜した時期と指摘した。⁽¹⁾形の上で見ると、『先驅』は毎号五十頁であり、これは『デモクラシイ』の

二十頁(但し第八号のみは三十六頁)、『同胞』が八頁の小冊子であったことと比較すると、『先駆』時代の新人会がいかに機関誌づくりに力をそそいだかがわかる。この『先駆』に新人会は『デモクラシイ』を上回る新カント主義、マルクス主義、アナルコ・サンジカリズム、ギルド社会主義等の思想の紹介に努めた。『先駆』時代の新人会は社会改造・人類解放思想の研究と、機関誌を通じて新人会の思想を宣伝することにエネルギーの大部分が傾注された⁽¹⁾と述べても過言ではない。

しかしながら新人会は、思想研究のみを目的とする学生団体ではなく、現代日本の合理的改造運動に従う、ことを一大目標としていた。ここでいう改造運動というものは、人類解放を目的として正当化されるさまざまな運動である。いかなる改造運動に従うかは、新人会が置かれたその時々⁽²⁾の状況により異なった。新人会は時に応じ、労働者への接近、支部設立、学内外の啓蒙活動等を改造運動として採用してきた。『先駆』の時代の新人会が実践した改造運動は、その時の客観的状況と新人会の主体的状況により規制された。『先駆』の時代は大正九年であるが、一月、森戸事件発生、二月、東京で百十一団体による数万人の普選大示威運動に象徴されるように普選運動の昂揚、三月、経済恐慌突入、五月、日本最初のメーデー及び第十四回総選挙等々状況が刻々推移し、思想的にはサンジカリズムの全盛期であった。他方、新人会内部を見ると財政上の緊迫、宮崎龍介事件等が発生し、同会にとり物心両面にわたり困難な時代であった。叙上のごとき波乱の多い外的、内的状況の中で新人会は会の趣旨に掲げた改造運動に取り組んでいった。本稿は、この時期の新人会の活動を検討し、『先駆』に表出した新人会員の精神と狙いがどのように同会の活動に投影されていたかを探求しようとするものである。

(1) 中村勝範・吉田博司『先駆』の思想(『法学研究』第五十二巻第十号 昭和五十四年十月)。われわれの問題意識については、併せて以下の論文を参照されたい。中村勝範・内川正夫『デモクラシイ』の思想(右同 第五十二巻第二号 昭和五十四年二月)、中村勝範・酒井正文『同胞』の思想(右同 第五十二巻第十一号 昭和五十四年十一月)、中村勝範・内川正夫『ナロード』の思想(右同 第五十三巻第四号 昭和五十五年四月)、中村勝範・酒井正文『同胞』時代の新人会の活動(右同 第五十三巻第十一号 昭和五十五年十一月)、中村勝範・内川正夫『デモクラシイ』時代の新人会の活動(右同 第五十四巻第四号 昭和五十六年四月)、中村勝範・内川正夫『ナロード』時代の新人会の活動(右同 第五十四巻第三号 昭和五十六年三月)。

(2) 「新人会綱領」(『デモクラシー』第二号 大正八年四月 二〇頁)。なお、新人会成立の背景、事情については、中村勝範・酒井正文「新人会成立の背景」(『法学研究』第五十一巻第五号 昭和五十三年五月)を参照された。

二 活動の背景

『先駆』創刊号の準備が進む大正九年一月、森戸事件が発生した。東大経済学部助教授森戸辰男が、『経済学研究』創刊号に発表した論文「クロポトキンの社会思想の研究」が、危険思想とみなされ、同誌は発売禁止され、森戸と編集署名人大内兵衛が新聞紙法違反に問われた事件である。森戸辰男は前年十二月、新人会が創立一周年を記念して開催した第一回学術講演会で「生存権と労働の芸術化」と題して講演したばかりであった⁽¹⁾。森戸は新人会員外の人物中、吉野作造に次ぎ新人会と関係深い人物であった。新人会は逆境に答打たれてこそ、はじめて真摯にして自由なる生命の力が決定的威力を示す⁽²⁾、と記したことがあつたが、前年の『デモクラシー』の連続的発売禁止に続き、縁深い人物の筆禍という緊迫した状況のなかで、『先駆』の発刊に踏み切つた。

森戸事件は、学内外において、言論、思想、研究の自由につき、センセーションを巻き起した。新聞はもちろん、『中央公論』、『改造』等は、森戸事件の特集を編み、東大内では森戸擁護の学生大会が開催された。新人会は森戸擁護であつた。森戸問題は、思想家全体の運命の岐るる共通の戦闘題目であるから、各思想団体が一齐に蹶起してその思想を明らかにし、代表者を法廷に送つて極力勝利を確保しようとする努力することは当然である⁽³⁾、と新人会は主張した。二月七日、新人会は、黎明会、啓明会等各種の文化思想団体と会合し、「言論の自由を期し、文相、総長、経済学部教授会の責任を問う」決議を採択した⁽⁴⁾。同二十七日には、大学構内において宣伝演説会を開催、阿部次郎を招いて森戸問題を論じた⁽⁵⁾。新人会の森戸擁護運動は、学問の自由の確保という枠を越え、既存の制度に対する弾劾姿勢を呈示する機会でもあつた。新人会は、森戸処分を

引き起すような不合理な社会制度を改造するために結束して宣伝しているのだ、と宣言した。新人会の社会批判は大学批判にエスカレートし、大学は特権階級の御用学校に過ぎず、むしろ無産者の敵である、と追及した。このような大学批判は、当時のジャーナリズムではみられなかつた。⁽⁸⁾新人会の大学批判は、森戸擁護のために参集した学生大衆の感覚からは、かけ離れたものであつた。学生大衆は森戸を擁護したが、大学を敵視することはなかつた。新人会員と学生大衆との間にギャップが生じた。学生大会に新人会を代表して登壇した山崎一雄は、「我々はブルジョアの大学なんか何うでもよいのだ。騒ぐだけ馬鹿氣ている」と学生を煽動したが、このアジテーションは新人会と学生大衆とのギャップをさらに拡大させた。この反大学論は学生大衆の反感をかつた。⁽⁹⁾新人会には森戸事件を捉えて学生を粘り強く説得し、指導し、組織しようとする姿勢を欠いたが、それは反大学論を展開した新人会の主張に、森戸擁護に立ち上つた学生は当然に応ずるだろうと考えていたところから由来した。しかし学生大衆には新人会の大学論は理解できず、そのため逡巡し、受けいれず、その結果、反大学論に反感を抱くに至つた。新人会は、優柔不断な学生大衆が森戸擁護運動を有耶無耶、龍頭蛇尾に終息させたと批判した。⁽¹⁰⁾人類解放、社会改造を目標にひたむきに突き進んだ新人会は、進み過ぎて学生大衆から遠く離れた。青年知識階級すなわち大學生が資本主義的経済組織の下に、「賃金奴隷」として組み込まれているものとして解釈し、新人会は資本主義制度下の大學生は資本主義の補強人であり、大学はその補強人の製造所であると判断した。しかし学生大衆は自分達は賃金奴隷の予備軍だとも、また資本主義の補強人だとも考えていながつた。森戸事件は、新人会が大学生と大学を否定する立場を鮮明に表明した最大の学内の活動であつた。

『先驅』時代の新人会の活動は、森戸事件への対応から開始されたが、それは新人会結成以来の苦しい会内事情への対応と同時に進行したものである。新人会は、『デモクラシー』から『先驅』への改題の時期に経済的困難に直面していた。『デモクラシー』第八号は、大正九年一月以降機関誌名を『先驅』に改題すると予告した。⁽¹²⁾民主主義の空気が新人会員の希望以

上に日本に満ち満ちてきたための当然の結果である、と説明されたが、『先駆』の創刊は大正九年二月一日まで延びた。この遅延は、『デモクラシー』が、第五、七、八号と相次いで発売禁止処分を受け、これが新人会を経済的に不如意にさせたところの原因があつた。⁽¹³⁾ 発売にあらうとほとんど致命傷を負う、という。また『デモクラシー』創刊以来継続してきた星島二郎による人的、財政的援助が、同誌第七号を最後に打ち切られたことも、強い打撃となつて新人会の経済を制約した。新人会は『先駆』創刊号の一カ月遅延が、財政事情によることを公表した。⁽¹⁶⁾ 機関誌の発行継続には、その対応策が必要であつた。新人会は資金調達組織として、機関誌雑誌出資組合の結成を留意した。すでに星島二郎の財政的援助が望めなくなつた時点において、印刷体制の根本的改革のため、新人会は前記組合の計画を発表していたが、『先駆』創刊とともにそれを設立した。機関誌発行のための営業事務は、出版社大鑑閣に委ね、⁽¹⁸⁾ 発行資金の調達を出資組合が担当することにした。出資組合は株主組織とし、一株五円、総額千円の集金を計画した。⁽¹⁹⁾ 実際、この組合がいかなる範囲からの新入会員自身が出資者であつたことは満しか否か等々は不明であるが、組合理事山崎一雄をはじめ、林要、赤松克磨らの新入会員自身が出資者であつたことは推断できる。出資組合設立を告げた新人会は、お互に努力し、相互扶助の精神を發揮したい、⁽²⁰⁾ と決意し、資金調達のため、吾等は余裕ある毎にその増加を計つて、⁽²¹⁾ と記している。『先駆』の発行継続には、新入会員自ら相互扶助を実行する必要がある。⁽²²⁾ 『先駆』第三号以後、定価の値上げも行なつた。二十銭から二十五銭への値上げは、経済上窮余の策と説明された。

要するに『先駆』時代の新人会は財政上困窮していたが、よく毎号五十頁の機関誌を発行した。大正九年一月に生じた宮崎龍介の恋愛事件は、新人会結成以来の紛糾をもたらすことになつた。赤松克磨に代り雑誌『解放』の編集主任となつていた宮崎は、同月女流歌人伊藤（柳原）白蓮の原稿受領のため九州に赴き、夫ある同女史との間に恋愛事件を引き起した。⁽²³⁾ 新人会には、この宮崎の行動がビューリタンの精神を汚すものと映つた。新入会員は一同連名の絶交状を宮崎に送りつけた。新明正道は、その署名を右手で書くのは汚らわしいとし、左手で書いた。⁽²⁴⁾ 三月、新人会は宮崎を

除名に処した。⁽²⁵⁾宮崎の除名にみられた新人会員の潔癖性は、雑誌『解放』との絶縁にも拡大され、新人会は宮崎が編集主任である『解放』から、赤松克麿、山崎一雄、新明正道のスタッフを引き上げた。⁽²⁶⁾新人会と『解放』およびその発行所である、大鑑閣との関係は、前年七月以来継続し、この時期、『解放』編集部は新人会員で占められ、⁽²⁷⁾『先駆』の発行にあたっては、前出のごとく営業事務を大鑑閣が担当するなど密接であつたが、この宮崎の恋愛事件により、三月をもつて断絶した。新人会は、五月から聚英閣に『先駆』の発売元を変更した。新人会創立一周年記念である第一回学術講演集『民衆文化の基調』は、二月上旬大鑑閣から発売される予定であつたが、これも聚英閣に変更、七カ月遅れて九月に発行された。宮崎の恋愛事件は、新人会の機関誌発行体制を著しく混乱させた。新人会の本部移転も、この事件の手痛い余波であつた。新人会は、結成後、東京市外高田村の黄興邸を宮崎の父滔天の好意で、無条件で借りていたが、⁽²⁸⁾立ち退きを要求され、⁽²⁹⁾新しい本部を捜さざるをえなくなつた。約二カ月後、苦心の末本郷区駒込動坂町六六番地の小さな借家に移転することができた。⁽³⁰⁾広大な旧本部とは比較にならないものであつた。居住者は四人が限度であつた。⁽³¹⁾新人会は、高い家賃の心配もせねばならなくなり、「家なきプロレタリア」⁽³²⁾の悲哀をひとしお感した。新人会は、この動坂の借家に入る際、家主側の利欲に翻弄され、その言いなりに従わざるをえなかつた。立ち退きの催促に窮した新人会は、足元を見透かされ、家賃の値上げを吞まされた。話が纏まると、陰險そうな利欲そのものの差配の顔ははじめて輝いたという。新人会は家主と借家人との間に差配という緩衝地帯があつて、家主は不労所得を食い、差配は家賃を胡麻化して懐を肥すことがわかつていても、屈從せねばならなかつた。⁽³³⁾新人会員は、身を容れる家に不自由しているプロレタリアートの苦痛に似たものをここで体験し、社会改造への情熱を燃やした。七月、新人会は駒込上富士前五番地に本部を移転することで、手狭さだけは解消した。八、九人が収容可能な同本部は、『先駆』第七号から『同胞』全号、『ナロード』第七号までの期間の新人会本部となつた。宮崎除名により生じた動搖の余波は短期間に本部を二回異動させ、新人会本部が落ちついたのは『先駆』終刊間際であつた。

- (1) 「編輯便り」(『デモクラシー』第八号 大正八年十二月 三六頁)、および「新人会記事」(『先駆』第一号 大正九年二月)。
- (2) 「逆境に恵まるゝ生命」(『先駆』第六号 大正九年七月 一頁)。
- (3) 「銀杏の木蔭」(『先駆』第二号 大正九年三月 一八頁)。
- (4) 石堂清倫・堅山利忠編『東京帝大新人会の記録』(経済往来社 昭和五十一年六月) 三七一頁。
- (5) 「新人会記事」(『先駆』第三号 大正九年四月)。
- (6) 右同。
- (7) 「銀杏の木蔭」(『先駆』第二号一八頁)。
- (8) 森戸辰男「思想の遍歴八上」(春秋社 昭和四十七年五月) 一四六頁。
- (9) 菊川忠雄「学生社会運動史」(海口書店 昭和二十二年六月) 一〇〇頁。
- (10) 右同 一〇二頁。
- (11) 「銀杏の木蔭」(『先駆』第二号一八頁)。
- (12) 改題予告は、すでに「デモクラシー」第四号(大正八年六月)および同第五号(大正八年七月)において行なわれ、大正八年九月より改題されることになつてしたが、実際には延期されたから、『先駆』の発刊は五カ月の遅れであつた。
- (13) 「編輯室より」(『先駆』第一号)。
- (14) 「上富士前町から」(『同胞』第一号 大正九年十月 八頁)。
- (15) 増島宏「解題」(法政大学大原社会問題研究所編『新人会機関誌』△法政大学出版局 昭和四十四年三月▽ 五八五頁所収)、および太田雅夫「大正デモクラシー研究」(新泉社 昭和五十年一月) 二四七頁。太田によれば、『デモクラシー』の資金提供者は、星島二郎である。『デモクラシー』発行兼編集人信定滝太郎、印刷人岡本佐俊、印刷所三光堂、東京市本郷区真砂町三六番地、発行所東京市本郷区追分町一九番地は、星島二郎が主宰する『大学評論』と全く同じであつた。発行兼編集人の信定は星島との関係でその任につき、発禁号の罰金刑も信定が発行人として責任を負つた(右同)。
- (16) 「編輯室より」(『先駆』第一号)。
- (17) 「編輯便り」(『デモクラシー』第七号 大正九年十一月 二〇頁)。
- (18) 「編輯室より」(『先駆』第一号)。
- (19) 「編輯便り」(『デモクラシー』第七号 二〇頁)。
- (20) 「編輯室より」(『先駆』第一号)。
- (21) 「地下室より」(『先駆』第三号)。
- (22) 「新人会記事」(『先駆』第四号 大正九年五月)。

- (23) 宮崎龍介「柳原白蓮との半世紀」(『文芸春秋』第四十五卷第六号 昭和四十二年六月)を参照されたい。
- (24) 林要『おのれ・あの人・この人』(法政大学出版局 昭和四十五年六月)一五二頁。
- (25) 「新人会記事」(『先駆』第三号)。
- (26) 「新人会記事」(『先駆』右同)。
- (27) 「新人会記事」(『先駆』第一号)。
- (28) 佐々木敏二「新人会(前期)の活動と思想」(『キリスト教社会問題研究』第十三号 昭和四十三年三月 一六六頁)。
- (29) 前掲、林『おのれ・あの人・この人』一五二—一五三頁。林要によれば、宮崎龍介の弟から「特別のはからいで、この黄興の家を提供してきたが、こころなつたからには至急たちのいてもらいたい!」と要求された(右同 一五三頁)。
- (30) 「新人会記事」(『先駆』第五号。大正九年六月)。
- (31) 五月頃、本部に移つたのは、赤松克麿、門田武雄、山崎一雄、新明正道であつた(前掲、佐々木「新人会(前期)の活動と思想」一八一頁)。
- (32) 「借家を求めて」(『先駆』第五号 三八頁)。
- (33) 同右。

三 労働者との接触

新人会は結成以来、労働者と労働運動に熱い憧憬を寄せてきた。機関誌は友愛会の消息記事をはじめ、新人会員が接触した労働者の有様を興奮をもつて伝えた。労働者は新人会の愛人であつた。⁽¹⁾この労働者への憧憬は『デモクラシー』が『先駆』と改題されてもかわらなかつた。

嘉治隆一は、大正九年二月、新潟県高田から金沢へ向う途中、年若い「女工」の一団と遭遇した。⁽²⁾この時の熱い同情をそのままペンに託し「虐げられし女工生活の一面」を物した。⁽³⁾『先駆』における数少ない労働者の生活実態の報告文である。今世の中で最も可哀想なのは、なんといつても女工である、憐れな賃金労働者であり、ただの一度も人間らしい生活をする⁽¹⁾こともなく墓場に行く、と記した。ここには筋肉労働者でなく、職工でもない、最も弱者の立場にあつた労働者への満腔の

同情がある。新人会員の行動範囲が拡大されるにつれて筋肉労働者、職工以外の「女工」にまで関心は拡大されたが、彼女らに接近し、組織化を進めたとか、新人会の思想の宣伝をしたという実践の記録はない。研究論文を主体に編集した『先駆』に「女工」の生活実態を四頁にわたり紹介した嘉治の文は異例であるが、新人会員が目ざす解放さるべき人びとの中に「女工」が鮮明に把握されてきたということである。

大正九年三月にはじまった経済恐慌において、『先駆』は「資本家は戦を欲す」ときめつけた⁽⁴⁾。すなわち、恐慌下、資本家は労働者が恐いのである。彼等は自分達の破滅は恐慌によらず、労働者の運動によるということを知っているから、この機会に、労働者の悲境につけ込んで戦闘を挑んできている、として資本家の攻勢に警告を發した。大正九年四月、日本交通労働組合傘下の東京市電従業員が、前年十一月に続き、再度八時間労働制と日給制を要求して、ストライキに入つた。新人会はずでに前年、東京市当局に八時間労働制を要求した日本交通労働組合に関心を寄せ、紛争中の同組合の大会に赤松克麿を代表として出席させた⁽⁵⁾。当時の組合長中西伊之助は、新人会員の大学生諸君はロシアの大学生と同じ理想をもつて活動する人びとである、と組合員に新人会を紹介していた⁽⁶⁾。新人会は、この労働者のストライキに対して、市民の利害からいえば迷惑至極であるが、従業員の地位向上に対する当局の不誠意に反撃する運動として当然なことである、と擁護した⁽⁷⁾。労働者に対しては、産業における労働者の自治を要求する以上、特権階級による庄迫は当然覚悟せねばならぬ⁽⁸⁾、と説いた。急進的である。恐慌発生以前、大正九年一月、二月、赤松克麿、門田武雄が友愛会支部で講演したことはあつたが、⁽⁹⁾『先駆』の時代において、恐慌の最中新人会が労働争議にかかわるのは、この争議がはじめてである。『先駆』は、この組合が労働を以て社会の生命を育みつつある権威によつて自発的に団結を組織し、公共の機関を相互扶助の歡喜の支配するところたらしめんための努力を続けている、と援護した⁽¹⁰⁾。新人会の「相互扶助」的社会観を伺わせるものがあつた。

新人会の争議への関与の内容は詳らかではないが、同電車ストライキ報告会が開催されれば出席し、臆首された組合員と

の懇談会があれば、顔を出した⁽¹¹⁾。文化学会主催、電車罷業厳正批判演説会には、赤松克膺が出席した⁽¹²⁾。赤松は「労働運動と公共の利害」と題し、労働運動が社会改造運動なるがゆえに目先の利益たる公共の利害はあまり顧みる必要はない、曲直は批判するまでもなく労働者が常に正しい、と演説した。労働者絶対善論であり、資本家及び資本主義絶対悪論である。「ヴ・ナロード」を叫び、亀戸の労働者との連帯に欣喜雀躍していた赤松は、さらにエスカレートし、ここに労働者絶対善論まで進んだ。労働者は赤松らの愛人から絶対神に昇華した。このストライキ収拾後、検挙された八十三名の交通労働組合幹部の保釈出獄歓迎会には、山崎一雄、門田武雄、赤松克膺が出席した⁽¹³⁾。門田の演説は臨監の警官により中止を命じられた。山崎は、絶望的に決死の覚悟をきめた労働者の姿を目のあたりにして、当局の暴圧を確認すると共に、その姿の未来に労働運動の前進がある⁽¹⁴⁾、と記した。山崎のペンは、暴圧にあうことが疑いもなく労働者の前進につながると信じているところから書かれたものであり、暴圧される労働者であればこそ憧憬してやまないというものである。

労働者は新人会の愛人であり、愛人からいまや絶対神にまで昇華したが、その結末は、新人会の期待を裏切った。やがて労働者のなかから知識階級を排斥する動きがあらわれたからである。この動きをみて赤松克膺は労働者を批判した⁽¹⁵⁾。赤松は、一部の労働者が頭から排他的に筋肉労働者の看板を振り廻し、盲目的に知識階級が労働問題に容喙するのを忌避する態度を批判し、併せて日本現下の労働運動の状態に在つては、知識階級の貢献すべき余地の多いことを指摘した⁽¹⁶⁾。労働者の知識階級排斥に遭遇し、赤松のみならず、新人会は従前の性急な労働者への接近姿勢を反省し、労働者が知識階級を信頼できないとする理由に耳を傾けようとした。新人会は労働者から知識階級が不信をかう理由は、饒舌とその知的矜誇にあると思いつた⁽¹⁷⁾。饒舌はわかるが、知的矜誇は知識階級が自らは気づきにくい。しかしいつたん知的矜誇が労働者から拒否されていることを知つた以上、新人会は、これらを捨てなくてはならない。もしそれを捨てなかつたならば、労働者の感激と信頼をかちえられぬ、浮誇と虚栄を棄て去る時、知識階級ははじめて、労働者と共に社会改造の運動に参画できる、と反省した。

新人会は労働運動における知識階級批判を展開した大杉栄の論説にも傾聴すべきものがある、とさえ記した。新人会は、『先驅』の時代において、対労働者関係の在り方について反省をした。従来、新人会員は労働者を愛人と考えながらも、その労働者を指導できると考え、事実指導してきた。知識階級の排斥に遭遇し、知識階級である新人会員は知的矜持をすててはじめて労働者と連帯できるということを知的に悟つた。知的に悟つたということは、それが言行一致となつたということとは別である。つまり知的矜持をすてたということではない。文章では労働者との連帯を綴るが、新人会員の意識を支配していたものは、エリート意識である。このことは一九八一年の今日、七十歳を越えている元新人会員をインタビュしても、二言目にはわれわれは知識階級であつたし、エリートであつたという言葉が必ず出てくるところからもわかる。⁽¹⁹⁾ 甲府に居住し、新人会と連帯して運動を展開していた小沢景勝について触れた元新人会員は小沢は、学歴がほとんどない人であるが、実に感心な人でよく色々なことを研究している人である、⁽²⁰⁾ という。東京帝国大学出身・在学生であつたというエリート意識は慎重に選択しながら使用する言葉そのものよりも言葉に伴うイントネーション、雰囲気の中にただよっている。ついでに記せば、知識階級排斥の論文を執筆した大杉栄、近藤憲二その他の論者がいずれも純粹労働者であつたというのではなく、知識階級の落ちこぼれが多かつた。労働者は必ず知識階級を排斥したのではなく、前述の小沢景勝は新人会本部を訪ね、三輪寿壮の下宿に寝起きしたことを昨日のことのようにいまなお鮮やかに記憶している。⁽²¹⁾ 知識階級排斥は大杉、近藤らが主唱するサンジカリズムに影響された集団においては波及していたことも事実である。しかしながら労働者すべての共同認識とまではなつていない。

大正九年五月二日、わが国初のメーデーが、東京・上野公園でおこなわれた。参加の労働団体は友愛会をはじめ十五組合、社会主義者および学生団体も加わつた。新人会は他の学生団体とともに制服で参加した。⁽²²⁾ 当日のスローガンは治安警察法第十七条撤廃、失業防止、最低賃金法設定の三要求であつた。⁽²³⁾ 鈴木文治、松岡駒吉の他、新人会の先輩である麻生久、石渡春

雄らが労働団体を代表して登壇し、演説をした。新人会機関誌は、メーデーに現われた労働者の創造的精神は一つの驚異である、浅黄の職工服や垢まみれの着物の労働者が次々と壇上において発言するところは邪念なき聴衆の心胸にぐんぐん共鳴を喚び起していく、と記した。このメーデーに他の新人会員と共に参加した波多野鼎は、新人会員が関係して結成された新人セルロイド工組合、新人印刷工組合がここに参加したこと、演説会が解散命令をうけ、騎馬巡査の馬蹄で蹂躪され、一目散に逃げたこと等を語っている。⁽²⁵⁾

東京日日新聞社が行なつた失業実地調査に新人会が協力したことも『先駆』時代の新人会が労働状態への直接の接触として留意しておきたい。同社は大正九月七月、東京帝大、早大、慶大の学生二十一名を選び失業の実地調査を行なつた。⁽²⁶⁾ 東京帝国大学では吉野作造に関係のある新人会員がこれに従つた。東京方面は平貞蔵、新明正道、山崎一雄が調査にあたり、長野・群馬・八王子方面は門田武雄が担当し、京都・大阪・神戸方面は早坂二郎、松沢兼人が分担した。⁽²⁷⁾ 早坂二郎と組んだ松沢兼人は、神戸においては帝大基督教青年会を通じて親交のあつた賀川豊彦の關係していた貧民窟に投宿し、川崎・三菱両造般所の失業状態を調査した。⁽²⁸⁾ この調査は新人会だけが協力したわけではなく、他大学の学生も参加したが、東京帝国大学において失業に対する誠実なる興味と知識を有する学生を選出するとなると新人会員が、まずあげられた。

- (1) 「村人語」(『デモクラシー』第三号 大正八年五月 一五頁)。
- (2) 「北日本の旅窓より」(『先駆』第二号 大正九年三月 四三頁)。
- (3) 嘉治隆一「虐げられし女工生活の一面」(『先駆』第四号 二八頁)。
- (4) 新明正道「時代批判」(『先駆』第六号 大正九年七月 二頁)。
- (5) 河西一郎(河西太一郎)「時評」(『デモクラシー』第八号 大正八年十二月 二八頁)。
- (6) 赤松克麿「新人会の歴史の足跡」(『改造』第十卷第六号 昭和三年六月 七三頁)。
- (7) 赤松克麿「時代批判」(『先駆』第四号 大正九年五月 一七頁)。
- (8) 山崎一雄「時代批判」(『先駆』第五号 大正九年六月 六頁)。

- (9) 中村勝範・酒井正文「同胞」時代の新人会の活動（『法学研究』第五十三卷第十一号 昭和五十五年十一月）を参照されたい。
- (10) 前掲、山崎「時代批判」（『先駆』第五号 四頁）。
- (11) 「上野と神田」（『先駆』右同 一五頁）。
- (12) 右同。
- (13) 「新人会記事」（『先駆』第七号 大正九年八月）。
- (14) 「熱風の中で」（『先駆』右同）。
- (15) 「時評——所謂筋肉労働者の醜態」（『解放』第六号 大正八年十一月）。
- (16) 赤松克麿「労働運動と知識階級の問題」（『先駆』第一号 大正九年二月 一六頁）。この論稿は、大杉栄に対する反論として書かれた。「大杉栄君の主宰して居る『労働運動』の一月号に『労働運動と知識階級』という一文が載つて居るが、其の中で自分は他の人達と一所に槍玉に挙げられて居る。それは昨年十一月の『解放』の時評で、自分が書いた『所謂筋肉労働者の醜態』なる一文に対しての駁撃である。大杉君は此の時評を書いた者は新人会の赤松君かと念を押して居るが、正しく拙者である。新年勿々槍玉に挙げられたのに対して、自分も一言苦情が言いたい。」（右同）。
- (17) 前掲、新明「時代批判」（『先駆』第六号 五頁）。
- (18) 大正九年七月二十一日夜、大杉栄は、近藤憲二とともに新人会を訪問しているが、「（『新人会記事』△『先駆』第七号）、半分冷やかしてあつた。近藤憲二によれば、次のようである。「大杉と本郷へ行つていておそくなり、一宿一飯を求めて新人会（帝大の学生団体）の合宿を探したことがある。夜も一時すぎであつたらうか。駒込上富士前停留場付近と聞いていたが、町名も番地もわからない。二人で怒鳴りまわろうということになり、夜なかの町を流して歩いた。大杉は吃りでカ行がうまく出ないから、彼が先に「アカマツター」というと私が「カツマロー」と続ける。「アカマツター」「カツマロー」二十分ほどすると、或る家の二階の小窓があいて、電灯の光が射した。「誰だー」と答えるのである。開けてもらつて入つた。機関誌『新人』であつたか「プロオド」であつたかの編集者が起きていてよかつたということであつた。合宿には、赤松克麿、山崎一雄、三輪寿壯、河西太一郎、新明正道らの諸君がいた。」（近藤憲二『一無政府主義者の回想』△平凡社 昭和四十年六月 二二二頁）。なお大杉栄・近藤憲二らの発行していた『労働運動』は「知識階級に与り」、「労働運動と知識階級」（共に第三号 大正九年一月一日 一頁及一七頁）及び「賀川豊彦論」（創刊号 大正八年十月六日 八頁）、「鈴木文治論」（第二号 大正八年十一月十三日 一二頁）、「賀川豊彦論・続」（第三号 大正九年一月一日 一六頁）等において大杉栄が労働運動指導者としての知識階級排斥の評論を執筆した。
- (19) 松沢兼人氏談（聞き手・宗片邦子、筋野通弘、桐野正晴、昭和五十年三月十七日（火）、十八日（水）松沢氏宅にて）。なお松沢氏とのインタビューは、いずれ資料として公表する予定である。
- (20) 千葉雄次郎氏談（聞き手・宗片邦子、玉井清、昭和五十六年一月十九日（月）エッセイスト・クラブにて）。なお千葉氏とのインタビューは、いずれ資料として公表する予定である。

『先駆』時代の新人会の活動

四二 (八八八)

(21) 小沢景勝氏談(聞き手・内川正夫、玉井清、昭和五十六年三月十二日(木)。小沢氏宅にて)。なお小沢氏とのインタビューはいずれ資料として公表する予定である。

(22) 麻生久伝刊行委員会編『麻生久伝』(麻生久伝刊行委員会、昭和三十三年八月)一七四頁。

(23) 大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』(大原正十年版) (大原社会問題研究所、大正十年七月)三〇頁。

(24) 「上野と神田」(『先駆』第五号、一五頁)。

(25) 波多野鼎「私はこう考える」(発行人・波多野幸子)一七頁。

(26) 「東京日々新聞社に於ては七月、東京帝大、早大、慶大の三大学生中失業に対する誠実な興味と知識とを有する二十一名の学生を選び、帝大の吉野作造博士、慶大の堀江婦一博士、早大の北沢新次郎教授をこれが顧問役とし、東京、大阪、名古屋、神戸、両毛、信州地方に涉り失業の実地調査を行わしめた。そして其調査結果の概要は九月八日以後の東京日々新聞に掲げられた」(大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』(大原正十年版) 五三七頁)。

(27) 「失業問題の実地調査」(『東京日日新聞』大正九年七月一日、第六面)及び「新人会記事」(『先駆』第七号)。

(28) 松沢兼人「回想新人会記」(慶應義塾大学法学部中村勝範研究会編『東京帝大新人会研究ノート』(昭和五十四年十一月二十日) 九頁所収)及び前掲松沢兼人氏談。なお、松沢氏は、神戸において失業調査にあたりながら、「夜は賀川先生について神戸や大阪の教会の講演会に出席し、先生の秘書兼手伝いのようなことをして歩いた」(前掲『東京帝大新人会研究ノート』)。

四 人物 往 来

新人会は、宮崎龍介除名の余波をうけ、二度に亙り本部を移転するなど慌しかつたが、本部及び大学構内が新人会員の研鑽と思想の交流の場であることに変わりはなかつた。大正九年春、新人会の会合は来客で賑わつた。賀川豊彦、森戸辰男、榎田民蔵⁽¹⁾ら従来から関係浅からぬ人びとのほか、ロシア生まれの盲目の詩人ワシリイ・エロシェンコ⁽²⁾、宗教運動家伊藤証信⁽³⁾の姿があつた。賀川、森戸、榎田らと、新人会員とは腹の底を語り合える仲だつた。彼らの一種悲壮な殉教的熱情には、興奮を覚えた新人会員であつた。賀川は神戸の貧民窟での貧民救済の実践者であつた。森戸は前出の筆禍事件の主人公であり、三月には禁錮刑の判決が下つていた。四月、五月、六月、新人会の会合には森戸の顔があつた。榎田も森戸事件に対する公憤

から大学を辞していた。新人会は、櫛田の尖锐なる学者的良心からすれば、自ら学問の權威を泥土に委ねた経済学部諸教授の間に、身を伍す事を潔しとしないのは誠に至当である⁽⁹⁾、と敬意を表わした。エロシエンコは、「まだ日本の一般の人々は眠っているではありませんか⁽¹⁰⁾」と新人会の意識を刺激した。この頃のエロシエンコはアナーキストでコスモポリタンであり、まだロシア革命とレーニンの支持者にはなっていない。コスモポリタンのエロシエンコと無我愛主義者の伊藤証信を迎えた。伊藤証信はトルストイの人道主義の影響を受けた宗教者として知られていた。新人会員が家庭の団欒のうちに伊藤と愉快に語り合うことができた⁽¹¹⁾のは、当時、伊藤がトルストイアンであつただけではなく、森戸事件に関心を抱き、共産主義にも関心を有していたからである。新人会員と伊藤とが親しく話し合える要素が幾重にも両者に存在した。上京中の各高等学校弁論部員を大学の控所に招き、思想の交換をおこなつたのも四月であつた。思想の交流、知識の研鑽の場は、こうした新人会本部や大学内のみに限定されることなく、新人会員の方から外に求めて出向いた相手もいた。堺利彦⁽¹²⁾、京都に在住する河上肇、朝永三十郎らの名前が登場する⁽¹³⁾。とりわけ河上、朝永との面会は、当時の新人会員の知的渴望の状況を如実に発露した行動であつた。新人会員は唯物史観に傾く河上肇を、熱烈なる人道主義的理想主義者であり、文化戦場の戦士である、あたかも唯物論者たるマルクス自らが理想主義者であつた⁽¹⁴⁾ように、と評した。朝永三十郎⁽¹⁵⁾は、理想主義の哲学者であつた。新人会員は河上肇と朝永三十郎との間に截然たる一線を画さぬまま、人道的理想主義者と二人を見立て、憧憬を抱いて京都に赴いた。このような学者、文化人との交流が、新人会員の研鑽を促し、『先駆』誌面に投影されたことは、同誌面を飾る諸思想が証明している⁽¹⁶⁾。

新人会がおこなつた地方人物との交流は、会員の意識の昂揚に益するものであつた。大正九年二月三日、赤松克麿、嘉治隆一の両会員と民衆詩人といわれた富田碎花の三名は、新潟県高田に入った⁽¹⁷⁾。富田碎花は、よく新人会員の前に姿をあらわし⁽¹⁸⁾、機関誌にも詩稿を寄せていた⁽¹⁹⁾。ホイットマンを愛し飄々として凝滞することない富田は、新人会員に親しく受け入れら

れていた。⁽²⁰⁾高田には、富田の芸術上の親友、渡辺平二がいた。渡辺はこの地方における文人として知られ、地元紙『高田日報』の文壇欄に寄稿する人物であつた。⁽²¹⁾新人会一行は、渡辺に迎えられ、渡辺宅に投宿した。二月四日、新人会は渡辺宅において思想問題懇談会を催した。会合自体は、誠に憂鬱な雪国にふさわしい、しめやかなものであつたが、⁽²²⁾新人会員には思わぬ副産物がもたらされた。その日、「新人会幹部来高——懇談会を開く」⁽²³⁾との新聞報道を見た一女性から投書が舞い込んだのである。懇談会に出席したいが、周囲の目があつて欠席する。代つて新人会の意見を新聞に載せて欲しい、⁽²⁴⁾という内容であつた。新人会は、「若き婦人のために」と題して『高田日報』に投稿し、虐げられし未知の婦人の声に応えた。現代婦人は男子の下にその人格的尊厳を汚され、人格的自由を奪われている、男子の所有物であり、玩弄物であり、生きた機械となつている、現今、世界の思潮は、人類解放の思想だ、⁽²⁵⁾婦人はこの奴隸的境遇を改革し、完全な人格者として男子と同等の地位待遇資格をえねばならない、という趣旨の投稿であつた。新人会員には、この婦人のような、積雪に埋れながらも外界の陽気に動かされ、強く伸びんとする草の若芽の雄々しさが、無上にうれしかつた。⁽²⁶⁾北国における未知の人物にも、新人会は、人類解放の思想を呈した。

大正九年五月、新人会は北京大学の学生代表者を迎えた。方豪、徐彦之、康白情、孟寿椿、黃日癸の五名であり、中国学生運動の一根軸たる少年中国学会の幹部であつた。⁽²⁷⁾五月十一日、新人会は大学内山上御殿において、歓迎の晩餐会を開き、相互の経験を交流した。⁽²⁸⁾早坂二郎は日中学生連合演説会が神田青年会館において開かれ、吉野作造について早坂が生まれてはじめての演説をしたと記録している。⁽²⁹⁾『先駆』は、「民国の友を迎う」と題する歓迎文を掲げた。生等は従来から国内における虐げられし無産階級のために義憤を感じて極力資本家の横暴を弾劾してきたが、今列強の侵略主義のために苦しめられつゝある貴国の現状を見ては、同じ憤りを発せざるを得ない、生等は特権階級に反抗する無産者の諸運動と同じ意味において、卿等の運動を賛美す、と共感を表明した。新人会の人類解放、世界平和を旨とする思想と行動が中国学生の招待と

なつた。他方、中国側の学生団体が来日したのは、新入会が侵略主義、特権階級の圧力との対決に取り組み日本の学生団体であることを熟知していたからである。当時の中国は、五・四運動を通じて日本排撃の気運が高まつていた時期であるから、新入会のような思想と行動を持つ団体の招待でなくては来日は困難であつた。

中国学生の来日は、新入会の招待により実現したものであるが、前年、新入会の宮崎龍介、岡上守道、平貞蔵、早坂二郎らが北京大学を訪問したことに對する答礼でもあつたとは早坂の記しているところである。さらにこれを根源的にさかのぼれば、吉野作造の日中国民の親善を願う働きかけの一環として実現したものである⁽³¹⁾。吉野は、北京大学の李大釗に手紙を送り、教授、学生の来日を促進した。さらに大正八年夏には、新入会先輩岡上守道が北京を通過する際、この件を李大釗に持ち込ませた⁽³²⁾。学生らの来日計画は、両者の都合により延期されたが、再び新入会員の働きかけもあり、北京大学教授高一涵以下前出の学生五名の来日が実現した。吉野はまた中国学生の来日に至るまでに宮崎龍介、平貞蔵、早坂二郎ら新入会員をも動かしていた。大正八年末から九年初めにかけて、宮崎龍介は上海にあつた⁽³³⁾。宮崎は学生連合会の大会に臨んで一場の演説をおこない⁽³⁴⁾、また上海学生団及び全国学生連合会の幹部と会合し、日中兩國の現状、将来につき意見を交換した⁽³⁵⁾。宮崎は日中交換についての吉野作造の意を伝え、中国側の判断を促した。大正八年十二月から大正九年四月まで中国各地を旅行した平貞蔵は、一月から二月にかけて早坂二郎とともに、北京大学に李大釗を二度訪ねている。李大釗は、北京大学の新しい思想をもつた人たち十人位を集めて、「東大の吉野作造門下の新入会員平貞蔵歓迎」という会を開いてくれた⁽³⁶⁾、という。意見交換は一度では足りず二度もおこなわれた。平は「北京大学の学生達と会いました。日貨排斥など一口も出さずに解放運動に就て話し合えるのは愉快です。新入会の事は皆非常によく了解しています⁽³⁷⁾。」と新入会に通信した。新入会は資本主義的秩序からの人類解放を国内において求めると共に、海外においても、また同様のものを求めた。

(一) 「新入会記事」(『先駆』第四号 大正九年五月)。

- (2) 「エロシエンコ君の談片」(『先駆』右同 四二頁)。
- (3) 「新人会記事」(『先駆』右同)。
- (4) 「新人会記事」(『先駆』右同)。
- (5) 「新人会記事」(『先駆』右同)。
- (6) 「新人会記事」(『先駆』第五号 大正九年六月)。
- (7) 「新人会記事」(『先駆』第七号 大正九年八月)。
- (8) 新人会と森戸辰男との交流は、その後も続く。森戸の留学以前に限れば次のようである。大正九年十月、新人会は、禁錮刑のため入監する森戸の送別会を開く(「上富士前町から」△同胞)第二号 大正九年十一月 八頁)。大正十年二月、出獄歓迎会兼外国留学送別会(「上富士前町から」△同胞)第六号 大正九年三月 七頁)。
- (9) 赤松克麿「時代批判」(『先駆』第四号 一七頁)。
- (10) 「エロシエンコ君の談片」(『先駆』右同 四二頁)。
- (11) 「新人会記事」(『先駆』右同)。なお、新人会は『先駆』誌上で、伊藤証信主宰の雑誌『精神運動』の創刊を紹介した(「精神運動」の誕生)△第二号 大正九年三月 二三頁)。伊藤が森戸事件に関心をもち、「無政府共產主義と無我愛主義」を『精神運動』第二号(大正九年二月一日)に発表したことは千葉耕堂『無我愛運動史概観』(無我愛運動史料編纂所 昭和四十五年四月一日 七六頁)を参照のこと。
- (12) 「地下室より」(『先駆』第三号 大正九年四月)。
- (13) 「新人会記事」(『先駆』第二号)。
- (14) 林要「評論の評論——唯物史観と理想主義」(『先駆』右同 一四頁)。
- (15) 新人会は朝永三十郎の論稿「新思想の哲学的基礎」を『先駆』(第二号 四四—四八頁)に掲載した。この朝永の論稿は「新人会へ御寄贈になった」(右同)と新人会の編集者の前文がついているが、編集に関与した林要によれば、朝永が他の雑誌に約束していたものだったという。朝永はただ見せるつもりの方であつたが、新人会は贈られたものと思ひ込んだようだ(林要『おのれ・あの人・この人』△法政大学出版局 昭和四十五年六月)一四六—一四七頁参照)。
- (16) 中村勝範・吉田博司「『先駆』の思想」(『法学研究』第五十二巻第十号 昭和五十四年十月)を参照されたい。
- (17) 「北日本の旅窓より」(『先駆』第二号 四二頁)。
- (18) 前掲、林『おのれ・あの人・この人』一二五頁。
- (19) 富田碎花「僚友の亡骸」(『先駆』第二号 三九—四〇頁)。恐らく、一月死去した会員村上堯の追悼の詩と思われる。
- (20) 前掲、林『おのれ・あの人・この人』一二五—一二六頁。

- (21) 例えば、新人会員一行の高田滞在の時期には、「目に涙して」と題する論稿を二月五日から七日まで『高田日報』に掲載している。
- (22) 『北日本の旅窓より』（『先駆』第二号 四二頁）。
- (23) 『高田日報』は新人会の高田到着を次のように報じている。「既報の如く東京帝大の新思想家を中心とせる有力なる団体『新人会』の幹部赤松克麿、嘉治隆一及び富田粹花の三氏は昨朝来高中殿通渡辺平二氏方に入れるが、氏を機として当地有志間にて講演会開催の企てありたるも流感蔓延の時節柄としてこれを中止し今四日午後一時より前記渡辺氏方に於て当地在住者にして新思想に共鳴を有する士を懇談会と催し意見の交換を為すべしと尚お一般有志諸君の来会を歓迎する由」（大正九年二月四日 第二面）。
- (24) 「心と心の叫びと叫き」（『先駆』第二号 四三頁）。
- (25) 新人会同人「若き婦人の為めに」（『高田日報』 大正九年二月九日△第一面▽、及び大正九年二月十日△第一面▽）。
- (26) 『北日本の旅窓より』（『先駆』第二号 四二頁）。
- (27) 『新人会記事』（『先駆』第五号）。
- (28) 『新人会記事』（『先駆』右同）。
- (29) 早坂二郎「新人会十年の歩み」（『祖国』第二卷第九号 昭和四年九月号）。
- (30) 『民国の友を迎う』（『先駆』第五号 一頁）。
- (31) 松尾尊允「大正デモクラシーの研究」（青木書店 昭和四十一年六月）二九七―三〇三頁参照。
- (32) 右同 二九八頁。なお、赤松克麿によれば、岡上守道は新人会の集会で北京大学生の様子を報告した。岡上は「新人会代表として北京大学に於て、熱誠な歓迎を受けた。そして北京大学生等が新人会の存在を熟知し、その活動に刮目し、『デモクラシー』を読んでいるのは少からず驚いた」という（赤松克麿「新人会の歴史的足跡」△『改造』第十卷第六号 昭和三年六月 七三頁▽）。
- (33) 宮崎には、上海行きは「年中行事」であった（宮崎龍介「新装の民国から」△『解放』第七号 大正八年十二月 一二七頁▽）。
- (34) 前掲、松尾「大正デモクラシーの研究」三〇〇頁。
- (35) 前掲、宮崎「新装の民国から」一二八頁。
- (36) 右同 一二九頁。
- (37) 平貞蔵は、新人会の中で、赤松克麿、石渡春雄、宮崎龍介らと意見が合わず、気まずい思いをしていたところ、吉野作造の勧めもあり、中国旅行に出かけた（平記念事業会編『平貞蔵の生涯』△平記念事業会 昭和十五年五月▽ 九七頁）。
- (38) 右同 一一〇頁。
- (39) 「心と心の叫びと叫き」（『先駆』第二号 四三頁）。

五 地方伝道

新人会は、『先駆』第三号から、綱領とともに毎号掲載していた「注意」に次の二項を追加した。一、会員ハ各地方ニ支部ヲ設立スルヲ得、二、会員其他有志者ノ希望ニヨリ本会ハ悦ンデ出張講座ニ応ズベシ、というものであつた。新人会は、地方支部設立と啓蒙宣伝という既存の活動を明文化した。地方支部の設立は、『デモクラシイ』時代に引き続き進展していた。大正九年五月、能登、福井の二支部の設立が報じられ、つづいて六月、小樽⁽²⁾、七月、熊本⁽³⁾の支部設立が伝えられた。設立間もない能登支部からは、夏期こそ宣伝活動の好機来るといふ通信があり、小樽からも現四名の会員の増加をねらうとの連絡が寄せられた。⁽⁵⁾ 熊本支部は、象のような従順な熊本の労働者の涙のために、会員は犠牲となることを厭いません、との決意が届いた。既存の支部も本部に便りを寄せた。広島支部からは、同年五月、総選挙の言論戦に加わり、普選派を推して、市内十数箇所において出演、また広島市内の労働団体を糾合して広島労働連盟を設立した、との通信があつた。⁽⁷⁾ 秋田支部は、同年中に新人会本部を訪問したい、との希望を寄せ、金沢支部は、農民の中に思想を宣伝して行かねばならぬ、との決意を披瀝した。同年七月、門田武雄は鹿児島からの帰途、広島支部を訪れ、同支部の丹悦太、三崎良水と共に演説会を開いている。門田は、発展めざましい同支部に出張して宣伝することは、子供が発展しているのを親が見に行くに等しい、と表現した。門田を迎えて行なわれた演説会では、失業問題に関する熱烈なる絶叫が会場を凄然たらしめた。門田は、生産者の世界と社会運動の帰結という演題を選んで、来るべき社会における労働者の生産支配を力説した。広島支部は、新人会支部のなかで、最も活動的支部であつた。⁽¹¹⁾ このように、地方支部発展の鼓動を確実に受けとめた新人会は、機会を生かし、それが増幅を計つた。

地方への思想の浸透には、直接赴くに如くはない。大正九年四月十四日から二十二日までおこなつた信州への宣伝旅行は、

新人会結成以来、最初の本格的な地方啓蒙活動となつた。一行は赤松克麿を監督格に、新明正道、門田武雄、千葉雄次郎、三輪寿壯、途中合流の小岩井淨、山崎一雄であつた。彼らの胸ははじめての地方宣伝の快を思つて躍つた。⁽¹³⁾第一日目は甲府に一泊し、革人会の矢崎源之助、小沢景勝ほか二名と交流した。革新を叫ぶ地方の純真な青年の真摯な態度と言葉は、新会員の胸に強く美しい感銘を残したと記録されている。小沢は矢崎らと共に十四日の夜、宿に新会員を訪ね、その夜おそくに再度一人で訪ね、翌日は信州に向う新会員一行の乗つた汽車に同乗し、県境に近い長坂駅まで一人で送つた。青年知識階級と地方の労働青年との熱い交流である。新人会にもつとも共鳴していた小沢は、大正八（一九一九）年春頃、新聞広告により『デモクラシイ』の存在を知り、購読しただけでなく、新人会の支部をつくらうとした。⁽¹⁵⁾支部結成の相談を高等小学校の時の担任の教師に相談したところ、当時、『デモクラシイ』は危険視されていたため、教師は賛成しない、同級生に相談しても、小沢の提案を理解できる者はいなかつた。⁽¹⁶⁾そもそも小沢は自作農の一人息子として、わがままいっぱい育つていたが、十一歳の時、母の死に会い、それが契機となり社会問題に関心を抱くようになった。その結果、寸暇をおしんで読書をするようになり、そこから『デモクラシイ』に魅せられ、新人会に接触するようになった。⁽¹⁷⁾新人会一行が甲府に入ると連絡があつた時、革人会は新人会の講演会の企画を立てたが、会場を取る時間がなく実現できなかつた。⁽¹⁸⁾小沢は詫げる気持で新人会員に寄附金として五円を渡した。⁽¹⁹⁾小沢の語るところによると、新人会一行が甲府に来ることが通知されてきた時と、甲府到着の間に時間的ゆとりがなく会場を確保できなかったという。もし、会場さえ確保できていたならば、この宣伝旅行の第一回演説会は甲府であつた。第二日目、伊那において第一回目の演説会がおこなわれて以後、上諏訪にて第二回目、松本第三回目、⁽²²⁾塩尻第四回目、⁽²³⁾長野第五回目、⁽²⁴⁾上田第六回目と続き、第七回目の長瀬における「社会問題演説会」をもつて、一週間を超える啓蒙宣伝旅行は終了した。講演テーマは、人道主義、社会主義、理想主義、社会改造論、階級闘争論等々が選択されたが、田園生活への復帰を説くものもあつた。以上の演説会は、予め準備された会場において、地元新聞記者、小学

校長らの斡旋により開催された。聴衆は、農村青年をはじめ、地方知識階級、小学校教員、高等学校生等多彩であつた。信州への第一歩は前述の通り伊那であつたが、この地は地図でみるとかなり山奥であるにも拘らず、書店をのぞくと『解放』、『改造』、『我等』等という雑誌が山積して置かれていた。このことから、この県では読書欲が旺盛だ、と新人会員は想像した。信州の人びとは新人会員の話を熱心に聴き入つた。信州は、新人会にとつて手応えのある場所であり、最も思い出深い旅行地となつた。⁽²⁷⁾

新人会員は、信濃路を巡りつつ、この地が「何となくロシアを思わせる国」⁽²⁸⁾であると感ずることもあつた。またこの信濃の自然は人びとの胸に自由に対する憧憬を懐かせる、それはあるがままの明るさではなくて暗い沈痛な底から求める自由に対する態度である、その辺が最もロシアに似ている、⁽²⁹⁾とも記した。世界を揺さぶつた社会改造、歴史はじまつて以来の人類解放の口火はロシアにはじまつたという考え方が新人会員にあつた。信濃路がそのロシアに似ていると思ひこむところに新人会員の真姿がある。新人会員は革命の舞台を行く主人公に自分たちを見立てていたのである。新人会員は自分たちが革命の担い手であるかのごとく錯覚していた。その彼らから見て信濃路をたどりつつ見聞したものは、平静にして悠久、平和な自然をひき裂くかのように林立する煙突、工場群であり、その下での奴隷のごとき製糸女工たちの哀歌であつた。到るところに刻下の資本主義経済組織の不正が暴露されている様が見られた。新人会員は、人類解放の信念と現状破壊の熱意をもつて、邪悪に濁れる資本主義的人間社会を、自然の純真な万古の姿に矯革せぬばならぬ、とその使命を決意した。新人会員たちは、こうした旅行を通して啓蒙宣伝するからには、自らの播く種もやがては芽を吹かなければならぬ、花も咲き実も結ばなくてはならない、大地という大地に、人類の解放運動という新しい芽の青々と吹き揃うまでは、巡礼を続けなくてはならぬ⁽³⁰⁾、と思うのであつた。新人会員による信濃路の旅は、巡礼であつた。それは新人会の人類解放の精神を地方に伝道する旅であつた。宮崎龍介は、自らを社会の行脚者なり、巡礼者なり⁽³¹⁾、と記したことがあつたが、宮崎去つた後の新人会員

も、自らを巡礼者、行脚者とする意識には変るところがなかつた。

- (1) 「新人会記事」(『先駆』第五号 大正九年六月)。
 - (2) 「新人会記事」(『先駆』第六号 大正九年七月)。
 - (3) 「新人会記事」(『先駆』第七号 大正九年八月)。
 - (4) 「新人会記事」(『先駆』右同)。
 - (5) 「新人会記事」(『先駆』右同)。
 - (6) 「心と心」(『先駆』右同 四八頁)。
 - (7) 「新人会記事」(『先駆』第六号)。
 - (8) 「新人会記事」(『先駆』右同)。
 - (9) 「新人会記事」(『先駆』右同)。
 - (10) 「鹿児島と広島」(『先駆』第七号 一九頁)。
 - (11) 広島支部の活動については、中村勝範・酒井正文『同胞』時代の新人会の活動(『法学研究』第五十三卷十一号 昭和五十五年十一月)を参照されたい。
 - (12) 赤松克麿「新人会の歴史的足跡」(『改造』第十卷第六号 昭和三年六月 七二頁)。
 - (13) 「信濃路の春」(『先駆』第五号 三九頁)。
 - (14) 内務省資料によれば、革人会は山梨県在住矢崎源之助が大正十年十月一日組織し、自宅に於て毎月一回会員の集会をおこない、思想問題等に関する研究論議をする、となつている(日本近代史料研究会「大正後期警保局刊行社会運動史料」(日本近代史料研究会 昭和四十三年十二月) 一一二頁)。
- しかし、新人会が記録するところによると大正九年四月には、すでに革人会は成立していたことになつている。機関誌『革人』創刊号は未見であるが、第二号は大正十年十一月一日発行となつており、以下第三号は同年十二月一日、第四号は大正十一年一月一日に発行されている。第五号以降発行されたかどうかは不明である。なお、右の発行の間隔から推測すると創刊号は大正十年十月一日ということも考えられる。そうだとすると内務省資料の革人会創立年月日は機関誌創刊号発行の年月日であろうか。
- (15) (19) 前掲「小沢景勝氏談」
 - (20) 演題と弁士は次の通りである。小岩井浄「農村青年の目標」、門田武雄「土地国有」、千葉雄次郎「改造の方向」、新明正道「貧困と奴隷」、赤松克麿「社会主義と人道主義」(『信濃路の春』△『先駆』第五号 四一頁▽)。
 - (21) 演題と弁士は次の通りである。門田武雄「社会改造と政治的力」、千葉雄次郎「田園への復帰」、三輪寿壮「社会改造の二途」、新明正道「貧困と奴隷」、赤松克麿「帝国主義と資本主義」(『信濃路の春』 右同 四一頁)。

- (22) 演題と弁士は次の通りである。山崎一雄「社会運動と宗教的精神」、三輪寿壮「普通選挙の文化的意義」、門田武雄「所有衝動と創造衝動の社会化」、新明正道「階級闘争と平和論」、赤松克麿「人道主義と社会主義」(『信濃路の春』 右同 四三―四四頁)。
- (23) 演題と弁士は次の通りである。千葉雄次郎「法則と文化」、三輪寿壮「二つのユートピア」、山崎一雄「芸術と社会問題の関係」、新明正道「階級闘争と平和論」、赤松克麿「社会運動と理想主義」(『信濃路の春』 右同 四四頁)。
- (24) 演題と弁士は次の通りである。小岩井浄「第四階級の使命」、三輪寿壮「民衆運動と知識階級」、新明正道「政治の苦痛」、千葉雄次郎「労働運動と其批判」、門田武雄「婦人解放と生産関与」、赤松克麿「国家の理想」(『信濃路の春』 右同 四五頁)。
- (25) 演題と弁士は次の通りである。千葉雄次郎「田園への復帰」、山崎一雄「社会改造と婦人運動」、門田武雄「労働の変遷」、新明正道「軍国主義の煩悶」、赤松克麿「新時代と労働運動」(『信濃路の春』 右同 四六頁)。
- (26) 演題と弁士は次の通りである。小岩井浄「社会改造の方向」、山崎一雄「普通選挙と農民」、新明正道「民力涵養を批評す」、門田武雄「農村と社会主義」、三輪寿壮「都市と田園」(『信濃路の春』 右同 四七頁)。
- (27) 前掲、赤松「新人会の歴史的足跡」。
- (28) 「信濃路の春」(『先駆』第五号 四二頁)。
- (29) 「信濃路の春」(『先駆』右同)。
- (30) 「信濃路の春」(『先駆』右同 四六頁)。
- (31) 宮崎龍介「血潮録の後に」(『先駆』第一号 大正九年二月 四五頁)。

六 結 語

『先駆』時代における新人会の活動は、前誌『デモクラシイ』時代のそれと比較した場合、少くとも、実践的活動において後退していた。新人会内に諸事情を含んだ時期とはいえ、総じて地味な活動期であつた。人類解放に役立つと思われる諸思想の研究に比重がおかれていたからである。経済不況下、労働者の状態に関心を示しながら、一定の距離を伺わせる姿勢もとつた。しかしながら、この時期の実践活動の真価は、地方への宣伝活動のなかに汲み取ることができた。新人会員は、そこにおいて、自らを巡礼者と規定することに、何の躊躇もなければ、銜もない。新人会は、われわれは原始生活に復帰

するの心持ちこそ必要だ、と熱望したが、宣伝旅行においては、自然な村落の景観に憧れた。この自然とその下での生活を破壊する物質至上主義、すなわち資本主義文明に対しては、怒りを直情的に表わした。すでに論じたごとく、『先駆』において新入会員が受け入れた思想は多彩であつたが、人間社会と人間の思考を墮落させる物質主義から人間を解放するという観点よりさまざまな思想が紹介された。伝統的な共同体社会への憧憬、社会改造、人類解放が新入会の思想であつた。新入会員は、これらのものを清教徒的に、あるいは巡礼者のようにひたむきに求道した。『先駆』時代は、活動分野が啓蒙活動に絞られていただけに、この求道の姿勢が集約的にそこに現われた。

(1) 門田武雄「自由の生命と経済生活」(『先駆』第四号 大正九年五月 二四頁)。

(2) 中村勝範・吉田博司「『先駆』の思想」(『法学研究』第五十二巻第十号 昭和五十四年十月)を参照されたい。

後記 本稿は中村・酒井の共同論文であるが、一九七八年七月からはじめた「新入会研究会」の共同研究の成果でもある。研究会のメ

ンバーは内川正夫(幾徳工業大学講師)、吉田博司(八戸大学講師)、宗片邦子(慶大大学院法学研究科政治学専攻修士課程在学中)、玉井清(慶大法学部政治学科四年在学中)である。なお今回は中村勝範研究会の二学生筋野通弘、桐野正晴君の協力を得た。